

9 回生 宮崎智之さん (佐賀市出身)



世界中の苦しむ人のために

～基礎研究の無限の可能性～

1992 年 4 月 弘学館中学校入学
1998 年 3 月 弘学館高等学校卒業
2004 年 3 月 横浜市立大学医学部卒業
2010 年 4 月 同学部生理学助手
2012 年 5 月 同学部生理学/麻酔科学助教
2016 年 4 月 同学部生理学/麻酔科学
准教授

闘う集団・学年の中で ～自然と高め合う関係～

私の出身学年が特にそうでしたが、今考えると非常に優秀な学年で、学生時代は単に勉強をするだけでなく将来のことや哲学的なことなどを延々と語り合っていたように記憶しています。実際に大学受験が終わり、同級生の多くが一流大学に進学しましたが、そうした同級生と日常的に切磋琢磨できたことが何よりの宝だと思います。これは東大理Ⅲ出身の知り合いにも言われたのですが、なんとなく周りと同じように毎日頑張っているだけで、気付くといいい成績が取れていた、という感覚です。一人でがむしゃらに勉強するのではなく、学年(同級生)や学校がそうした雰囲気であることが重要なのだと思います。そうした雰囲気を主導的に作るのは学校ではなく、むしろ在籍する学生一人一人です。

地道な基礎研究の先に 見えてきた可能性

私は元々医学部に行きたかったわけではなく、父や祖母の勧めで受験しました。中学生の時に生徒会長をやったり新聞を発行したりと、何か(組織も)を作ることが好きだったので、医学部に入っても「研究」という作ることを主眼に置きました。臨床研修医と1年の麻酔科専従を経て研究の世界に入り、臨床応用できる研究を目指して研究に邁進してきました。その研究の結果、多くの精神・神経疾患の発症に関与する AMPA 受容体というたんぱく質の密度を生きた患者さんの脳内で測定できる放射性薬剤の開発に成功し、世界的な雑誌に掲載されました。現在は多くの患者さんを対象としてこの診断薬の性能を検討しており、5年後を目途に日本国内で販売できることを目指して開発を進めています。

(2020 年 9 月現在)

受賞歴

2012 年 武田科学振興財団
ビジョナリーアワード
2017 年 横浜市立大学学長賞
2018 年 横浜市立大学学長賞
2020 年 医療科学雑誌
「NATURE MEDICINE」
に論文掲載

宮崎智之さんのとある一日

9:00 週2日自転車か徒歩で
通勤(20kmの道のり)
10:00 研究関係者との会議
11:00 大学にて研究方針会議
13:00 臨床研究のための診察
等
16:00 他機関の共同研究者と
のWEB会議
18:00 論文執筆など
21:00 帰宅

後輩へのメッセージ

在校中は自宅に帰らないので、夕食時などいろんなことを同級生と議論し、そうした中で「自主的に考える」基礎ができたように思います。医学部の教員として講義や入試面接もやっていますが、横浜市大の学生でも自ら考える力はそんなに無いなと少し残念に思っています。特に新型コロナの影響で、職業選択も難しく、さらに着いた仕事において他人を差し置いて自分が選ばれないと生きづらくなりました。自分のキャリアをどう形成するか、先に考えて行動した者のみ生き残れます。